

認知症の高齢者

寄せ植え作りなどの園芸作業の際、認知症の高齢者の脳の一部の働きが活発化していることが、県立淡路景観園芸学校（淡路市野島常盤）の豊田正博准教授

教授（47）＝園芸療法学＝らの研究チームの実証実験で分かった。認知機能の低下に伴い、使われなくなった脳機能を再び働かせる効果もあるといい、豊田准教授は「認知症の進行自体は止められないが、会話がスムーズになるなど一定効果は見込める」と話している。

（高森 亮）

園芸で脳機能活発化

園芸を高齢者や障害者のリハビリに活用する

をしたときの脳の血流変化を調べた。

血流増加が目立った。

同様の調査を健康な高

齢者20人に実施したところ、血液の増加はいずれの作業も1・3倍程度だった。

「土を混ぜる」「花を鉢に植える」などの行為の際、思考や判断など高度な精神活動をつかさどる前頭葉の血液量は、何

もしていないときと比べ最大1・7倍に。脳細胞の働きが活発化していることが数値で裏付けられた。とりわけ、「土を混ぜる」という作業の際、

認知機能が低下している状況では、花の位置を決めるなど複雑な判断が必要な鉢植えよりも、比較的簡単な作業の方が効果的であることがうかがえたが、豊田准教授は「簡

単な行為だけでは高齢者は飽きてしまう。土を混ぜるという行為が、花を育てるといふ目的につながっていると自覚すること、脳の働きが活発化する」と指摘する。

豊田准教授は、作業後に高齢者の会話が aumentata 点にも注目。「人に見守られながら園芸作業をすることで周囲を意識するようになると、脳機能が活性化し、過去のさまざまなエピソードの記憶が刺激されて会話を生み出すきっかけになったのではないか。軽度から重度の認知症の人まで取り組んでもらえるので、療法として確立

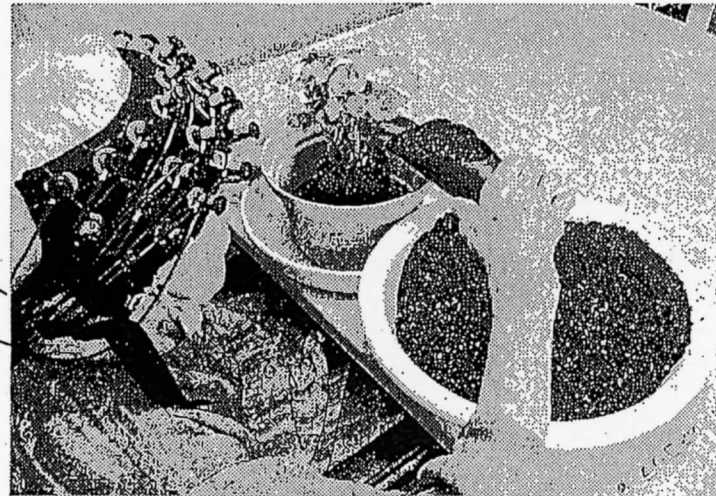
させたい」と期待を込めている。



豊田正博 准教授

情が豊かになった」「会話が增えた」といった効果が表れているという。

園芸療法の研究を続けている豊田准教授は、高齢者の表情から脳機能の活性化に着目。県内の病院や特別養護老人ホームの協力を得て、認知症の高齢者25人に測定装置を付けてもらい、園芸作業



脳の血流測定装置を付けて園芸に取り組む高齢者（県立淡路景観園芸学校提供）

記憶を刺激？ 会話増える

県立淡路景観園芸学校 豊田准教授らが実証

いし

